

戦前における日本と植民地とのスポーツ交流

その限界と可能性

尾島 雄大

日本大学国際関係学部国際交流科 2年

はじめに

スポーツは、多くの人達に親しまれているものである。今日では、“交流”試合、“親善”試合、“友好関係のための”スポーツといった表現を度々目にし、政府やマスコミは外交関係及び国際相互理解を促進する平和手段としてこのような言葉を好んで使っている印象を受ける。驚くべきことに、第二次世界大戦以前の日本でも 朝鮮、満州、そして中国（当時は支那）との間にスポーツ交流が行われていた。東アジアの人々に対し見下した態度をとっていた日本人も、スポーツ交流を通して彼らを理解した面があったのだろうか。そしてその結果、真の友情が芽生えることはあったのか。または、スポーツは行われていても交流はなかったのだろうか。

戦前、日本と朝鮮、満州、そして中国の間では、サッカー、卓球、バレーボール、ボクシング等々、本当に多くの種類のスポーツ競技が行われていた。日本人選手が現地へ遠征に行くこともあれば、朝鮮、満州等から選手を日本に招くこともあった。そして、そうした試合の結果は、どちらが勝ったかに関係なく日本の新聞が報道していた。

日本（宗主国）と朝鮮（植民地）、または満州（傀儡政権）との間で競われたスポーツ試合に関して、日本のマスコミが非常に多くの記録を残していることは、驚くべきことに思える。なぜなら、宗主国の国民が 彼らの差別の対象であった人々と“同じ土俵で”スポーツ試合を行うこと、そしてその結果敗北することもあったことが ごく当然のよう

に報道されているからだ。ここで、イギリスと かつてイギリスの植民地だったインドとの間のスポーツの試合を題材にした映画、『ラグーン〜クリケット風雲録〜』を紹介する。

1 2001 年度にインドで製作されたこの映画では、1890 年頃の植民地下のインドにおいて、不作に苦しんでいた農民に対し、イギリスの役人が例年の二倍の年貢（ラグーン）を納めるように指示する。これに不満な農民は直訴をするが、役人は、クリケットでイギリス役人チームと試合をし、勝てば年貢を三年間免除、負ければ三倍にするというという条件を出す。そしてクリケットのクの字も知らない農民が にわか修行のクリケット戦を挑むという話である。この映画に限れば、イギリス・チームとインド・チームの間で戦われたクリケットは、スポーツ試合本来の性格をもたず、交流でも親善でもない。いわば「政治かけひき的手段」であった。日本の植民地帝国内では、こうしたスポーツ試合はなかったように見える。では戦前の日本は なぜ朝鮮、満州などの国々とスポーツを戦ったのだろうか。

このペーパーでは、戦前の日本と東アジア諸国のスポーツ交流の特異性、可能性、あるいは限界を考察するため、当時の朝日新聞（1924 年から 1940 年まで）を主な資料に、以下の三つのスポーツ試合のあり方に注目した。第一に、純粋な友好関係を促進するためのスポーツ、第二に、国策（戦争、植民地政策の推進）のために利用されたスポーツを それぞれ概観する。最後に、1936 年のベルリン・オリンピックに日本代表として出場した“朝鮮人”の孫選手と南選手からみる 日本人と朝鮮人とのスポーツを通じた交流の姿をたどる。そして戦前日本の東アジアにおける国際スポーツ試合が、「友好と交流」を促進するものであったのかどうかを考えたい。

I. 友好としてのスポーツ

1924年4月の朝日新聞に、『日鮮人融和に 駒場で大運動会』という記事がある。² これは、1923年9月に発生した関東大震災をきっかけに不仲になった日本人と朝鮮人間の仲の修復を目的として行われたものである。関東大震災では、震災の混乱に際し根も葉もない噂が広まり、朝鮮人が虐殺されるという事件が起こっていた。ゆえに、運動会を開催し両者の「融和」を試みたのである。この運動会が、日本人の、特に政府関係者によって開かれたものであったのならば、そこには何かしらの政策性があっただろう。朝鮮人虐殺が引き起こした反日感情を抑えるため、朝鮮人虐殺という事実をうやむやにするため、又は、それにも関わらず植民地政策が上手くいっているということを国際社会に見せるため、等々の政治的意図が考えられる。しかし、驚くべきことに、この運動会は朝鮮人の学生によって提案されたものであった。さらに、そのような提案が、『甚だ有意義である』ということから、各方面で“日本人により”援助を受けていたのである。そしてその運動会後も この企画を絶賛するような記事が登場した。³

満州でも、奉天において1932年5月に建国記念運動会が開催された。朝日新聞の記事で、『満州国大運動会開く』というものによると、日本人、満州人だけではなく、朝鮮人、そしてロシア人も招かれて この運動会に参加していた。⁴ この記事の中で注目すべきは、『特に人目を引いたのは奉天ロシア学生の金髪と各地朝鮮人学生の純白な朝鮮服、満州国学童の灰色の服で如何にも満州国の運動会らしい情景であった』との文章である。それぞれの民族の特徴について述べられているが 特に『純白な朝鮮服』という部分からは、朝鮮人に対する差別意識といったものは伝わってこない。差別している民族の伝統的な服装に対し、純潔、清純なイメージをもつ『純白』という言葉は使わないだろう。

しかし、反対に気になる点もある。それは、ロシア、朝鮮、満州の国々を象徴する色の使い方である。記事からでは、「金」→「白」→「灰色」と色の移り変わりが見える。特に、ロシアの「金」と比較し、満州の「灰色」というのは、何となく差があるのを感じてしまう。これは、日本人の白人に対する憧れが表れているのではないだろうか。同記事に

は、もう一つ気になる点がある。『民族融和の尊びに輝く建国記念奉天大運動会』がいかに『満州国の運動会らしい情景だ』という表現である。日本による満州国の建国が、異民族の混在という“満州国らしい情景”を生んだという自画自賛で、今読み返すと何とも無責任な書き方といった印象は受ける。しかし、この運動会は多民族間の友好を目的に掲げたことは明らかだ。そして、記事を読む限りは日本人が抱く異民族への差別感情は決して露骨ではない。建前上にしても仲よくスポーツを競い合うイメージを強調している。

なぜ、戦前の日本においては植民地の人々を相手にする場合でも、スポーツは純粋に「楽しむスポーツ」「技を競い合うスポーツ」として存在したのだろうか。当時の日本は（現在でもそうだが）、スポーツにおいて決して強い方ではなかった。そして、国際試合において負け試合というのが頻発していた。したがって、スポーツで植民地に対して日本人の絶対的優越を示しにくかったのではないかと考えられる。しかしだからこそ、日本の植民地帝国内でスポーツは純粋なスポーツとして存在したのではないかと。

たとえば、ボクシング（当時は拳闘）を例にとる。拳闘の大会でも、満州、朝鮮とは頻繁に試合が行われており、特に朝鮮との試合が多い。その中で、日本人が勝つ試合もあれば、負ける試合もあった。当時の植民地の人々に対する日本の差別感情からすると、日本人選手が朝鮮人に殴られる場面を考えるだけでも大事になりそうなものである。しかし、朝日新聞で当然のように報道されていた試合結果をみると、朝鮮人がノックアウト勝ちをしている。さらに、朝鮮人選手の勝ち方として、日本人選手に対してノックアウトのみではなく、判定で勝利している試合もあった。⁵ 様々なスポーツで、「ホーム」と「アウェイ」という言葉が使い分けられているように、自国で行われ、尚且つ自国民が出場している試合となると、そのジャッジも自国（開催国）選手に有利な結果となりがちなのは現在でもよくあることである。しかし当時は、植民地の朝鮮人に対し、日本で日本人を相手にした試合において判定での軍配をあげているのである。これは、ジャッジするほ

どでもなく日本人が弱かったという解釈も可能かもしれないが、それ以上に日本人が、スポーツにおいては、フェアプレーを心がけ、また、公正なジャッジを行っていたということが窺えるのである。

そうした傾向は サッカーの試合においても顕著であった。日本は、中国、朝鮮のチームと幾度も試合を行っていたが、1930年以前はほとんどの試合で、大差で負けているのである。⁶ しかし日本のマスコミは、日本の敗北に対しては負けを素直に認め、相手の長所を挙げ、今後日本が強くなるように分析すらしている。朝日新聞には、『彗星の如き朝鮮軍の猛威』、『試合態度は立派であった』と相手を讃えている記述さえみられた。⁷ 同じアジアの中で脱亜の姿勢をとり、また、植民地の人々に対しては無理やり日本語を教え込ませ、相手の文化を全く認めていなかった日本が、スポーツになるとアジアの競技相手から学ぼうとする姿勢になっていたのは不思議なことである。

1936年のベルリン・オリンピックにおいて、サッカーやバスケットボールの日本代表は、日本人と朝鮮人の混成チームであった。⁸ サッカーやバスケットボールなどのチームスポーツというのは、選手間に信頼感に基づくコミュニケーションが確立していないとチームとして成り立たないものである。ましてや、選手間に差別感情が存在している場合チームプレーはありえない。日朝混成チームが編成されていたということは、既存の差別感情を克服して成り立っていたものといえるのではないか。

なぜこうした現象が可能だったのだろうか。理由のひとつに、当時の日本がスポーツ発展途上国であったことがある。イギリスの国民は 自国が発祥起源である多くのスポーツに対して、自分たちが老舗であるといった自信を持っていたに違いない。だから、そうしたスポーツのルールさえ知らないアジアやアフリカの植民地の人々と スポーツ試合で真剣に競い合うという発想自体なかったのではないか。一方、日本の場合は、欧米起源の近代スポーツに秀でていなかった。日本のスポーツを強化するためには、対外試合を繰り返し、研究するしかない。ここで注目すべきは、日本が植民地の人々で行っていたスポー

ツが、主に、サッカーやボクシング、バスケットボールといった、欧米起源のスポーツだったことである。日本、または東アジア伝統のスポーツを戦いあっていたという記述は見当たらない。日本の植民地支配者は植民地の人々に欧米発祥のスポーツを戦うことを禁じなかったのだ。たとえば、朝鮮では、1925年スポーツ大会開催のため京城運動場を竣工した。そこで競われる種目は年々増加拡大する一方であった。植民地の人々との試合を重ねることで、日本が実力をつけていくことを日本人は容認していたのだろうか。だからこそ日本人は植民地の人が相手でも真剣にフェアプレーの精神で戦ったのだろう。

II. 国策としてのスポーツ

フェアプレーの精神にのっとったスポーツは、日中戦争勃発以後、日本政府に利用されるようになっていく。『戦争とスポーツ』というような新聞記事が多数見受けられるようになるのである。⁹ スポーツが国家主義的目的に奉仕するべく利用されることは、日本だけでなく世界各地でみられることであった。しかし、日本にこの傾向が押し寄せてくると植民地の人々を相手にするスポーツ競技の性格及びそれに対する態度も変わっていく。

朝日新聞は、かつてラグビー選手であった人物のコメントを載せた。彼は、『戦争はスポーツである等といえは如何にも不真面目な又暢気なやうにとられるかも知れないが、戦争はより真剣な且国運を賭した最大なスポーツであると言へば私に同意する者も少なくないだろう』と述べている。彼はそれを『国防スポーツ』と呼んでいるのである。¹⁰ また実際に、戦場におけるスポーツの有効性を例に挙げている記事も出てくる。スポーツを行っていたおかげで、戦場で活躍することができ、さらに、スポーツを行っている人同士では、スポーツの話を通して軍隊内で早くに親しくなれるというのである。¹¹ こうな

るとスポーツは、外へ向けての交流の手段ではなくなり、逆に日本の閉じた社会でナショナリズムと軍国主義を強固にする手段となっていく。

ナショナリズムが高揚するようになると、スポーツ界でも、日本武道の意義が盛んに叫ばれるようになる。弓道や相撲の競技の大切さとは、『単なる技術的・娯楽的な意味ではなく、忠君愛国に燃える学童育成を目指さなければならない（ものである）』というように、巧妙にスポーツを日本精神に結び付けて、スポーツの日本化を計るのである。¹² 今まで行われていた欧米起源のスポーツを、全て『日本的競技』にするような再検討までがなされるのである。¹³

こうなると、日本の対外スポーツ政策も変わってくる。まず1940年、閣議決定に基づいて文部省は、日本の各大学スポーツチームに対し、満州への遠征を禁止するようになる。その理由は『それほどの好影響を齎さない』ためである。¹⁴ さらに中国に対しても日本の諸大学運動部の遠征を取り止めてしまった。その理由は『支那の技術の程度は甚だ低（い）』からだと言われている。日本が、中国にサッカー試合で多く負けていたのは前にも述べた通りのことである。戦争開始とともに日本チームの技術が飛躍的に高まったとは到底考えがたい。当時の朝日新聞記事を探してみると、日本チームが満州や中国のチームと戦ったスポーツの結果は見つけにくくなっている。あったとしても日本の“お家芸”の剣道、柔道といった武道の結果のみで、当然日本の圧倒的勝利である。¹⁵ 朝日新聞は、各スポーツで中国に対して『日本の技術指導と友誼的協力』を行う必要性を説いた。その記事においては東亜競技大会に出場するために遠征に来た中国代表団の団長に、各種競技において『勝敗優劣は考えず寧ろ日本スポーツ界のよき指導を受けたい』という、白々しいコメントまで言わせている。¹⁶ もっともこの「勝敗優劣は考えず」というのは、弱い日本に配慮あつてのことなのかは定かではない。いずれにしてもこの中国代表団の遠征で、サッカー等が行われる予定があつたが、その結果はついに朝日新聞には載らなかった。

スポーツ・ナショナリズムが高揚してくると、日本がスポーツ分野においても植民地の人々に対して優位に立とうとする傾向が強くなる。1940年3月の朝日新聞に『事変処理とスポーツの文化的使命』という記事が載った。「事変処理」というのは、スポーツを通して日本が仲良くしてやろうという姿勢であり、明らかに政策としてのスポーツになっている。¹⁷ なぜこのような姿勢へと変化してしまったのだろうか。それは、スポーツの種目が「日本の伝統的お家芸」に限定されるように変わっていったからではないだろうか。すでに見たように、欧米発祥のスポーツが対象であれば「日本人は」徹底した優位をアジア人に対して誇示することはできなかった。そのため、対戦相手がアジアの国でも勝敗にはこだわらず相手から学ぼうとした。しかし、スポーツ種目が「日本固有のもの」になると、植民地または他のアジアの国々に対し、優越感を前面に出せるようになる。そうすると、先に見たイギリスとインドが戦ったクリケットの試合の例と同様に、支配者と被支配者がはっきり分かれるかたちになる。例えば、仮に柔道の試合を行えば、その技術の優劣には支配者日本人と被支配者の力関係がはっきり投影される。日本はこうして今まで行ってきたスポーツに「日本精神」を付け加えることで、優位性を身につけようとした。そしてスポーツ試合を通して、植民地の人々に指導者としての絶対的位置を再確認させようとしたのではないだろうか。これはもはやスポーツ交流ではない。

スポーツをナショナリズムに利用することに異を唱える声も存在していた。¹⁸ たとえば、野球で使用される「アウト」や「ストライク」といった英語を日本語に改正するまでもないという非難である。また、スポーツを日本化するという動きは、本来のスポーツの本義に反するという意見もでた。¹⁹ こうした意見をもつ人々は、当時の日本庭球協会会長や大日本体育協会副会長というようにスポーツに直接携わっている人物である。他方、スポーツ・ナショナリズムを説く側には、あまりそのような肩書をもつ人は見当たらないようだ。実際にスポーツを行っていた者の方が、スポーツの純粋な意義を分かっていたのかもしれない。

Ⅲ. ベルリン・オリンピックの孫基禎

植民地の人々は何を考え 日本人とスポーツを競ったのだろうか。今までみてきたものは、日本人の視点からのものばかりだった。日本人がフェアプレーと考えていても、植民地の人にはそうは考えなかったかもしれない。

ここで、1936年のベルリン・オリンピックに、マラソンの日本代表として出場した孫基禎選手と南昇竜選手という二人の朝鮮人に注目してみる。孫選手と南選手はベルリン・オリンピックのマラソン競技で、それぞれ一位と三位という輝かしい成績を残した。²⁰ 日本の名誉をかけた代表として、朝鮮人をオリンピックに出場させたことはある意味注目に値する。植民地出身者が、日本人と一緒に日本代表としてオリンピックに出場することに対して、日本国内で批判はなかった。そして、オリンピックで、両者が好成績を残した後、日本全土は彼らを称え、祝福し、様々な人物が祝いのコメントを寄せた。その理由は、簡単にいえば彼らが日本の国威昂揚に貢献したからである。

彼らに対する朝日新聞の扱いはどうだったのだろうか。試合前から注目されていた孫選手は、オリンピック前の新聞のインタビューでは「ベルリンに『君が代』を聞かせてやりますよ。」と答えている。²¹ また、試合後のインタビューにおいても「優勝することになりましたのは皆様（日本）のお蔭だと存じております。」と言っている。²² しかし、ここで南選手のインタビューをみてみよう。彼は「母国の皆様、こんばんは——（優秀な成績を残したのも）母国の皆様の後援だと——また、祖国に帰りましてシミジミと御挨拶申し上げたいと思います。」と述べている。²³ 彼は、「母国」と「祖国」と使い分けている。南選手は、暗にそのどちらかの表現で本当の自分の国である朝鮮にメッセージを送ったのではないか。日本の植民地政策により、日本代表としての出場を余儀なくされた

ことに対する南選手の、ひそかな、しかし堅固な抵抗の意だったのではないだろうか。

日本への抵抗精神は、孫選手の態度からさらに明らかになる。彼はベルリンにいる間、外国人からサインを求められたときは、全てハングル文字で署名し、その傍らに朝鮮半島の略地図を描くか、KOREA と記し、自分が日本人ではなく朝鮮人であることを理解させようとしていた。また、ベルリン市内を走る練習の時も、出来る限り日の丸のついていないウェアを着用していたのである。さらに、表彰台で君が代が流れたとき、孫選手は頭を垂れ、涙を流した。当然日本人は、それを優勝に感激した涙と受け取る。しかし、本当は、憤りの涙だったのである。²⁴ 彼は「彼自身のため、そして圧制に苦しむ同胞たちのために走った」のである。日本の新聞報道のみからは見えない孫選手の素顔が窺える。彼も、朝鮮に対するナショナリズムをもっていたのである。そして、朝鮮の人々も孫選手に朝鮮の代表として声援を送ったのである。その典型的な事件が『日の丸抹消事件』である。²⁵ これは、朝鮮の新聞『東亜日報』が、表彰台に登っている孫選手の写真から、ユニフォームの胸の日の丸を消して掲載した事件である。『東亜日報』に限らず、他の新聞でも、孫選手と南選手の活躍を 朝鮮の「解放」と称したのである。

朝鮮のスポーツ・ナショナリズムは、このベルリン・オリンピックをきっかけに始まったことではない。ベルリン・オリンピックが始まる以前から、日本人がフェアなスポーツ交流をしていたと思っていた頃からあった。日本人がスポーツ交流を行なう際に、彼らのこうしたナショナリズムを理解していなかったとしたら、いくら彼らと混成チームをつくっても、彼らからスポーツの技術を学ぼうとしても、彼らの日本人に対する勝利を褒め称えたとしても、真の友好、協調は生まれてこなかっただろう。朝鮮の人々が何よりも望んでいたナショナリズムを日本人が理解しない限り、いくら日本人とスポーツをしていても、心が通じ合うことはなかったのではないか。日本人の中には、植民地出身のスポーツ選手を応援した人もいたかもしれない。だがその行為は、結局は彼らの民族性を否定していたのではないか。孫選手の『日の丸抹消事件』後、『東亜日報』は無期限の

発行停止処分を受けた。また、内鮮人対立気運を醸成する虞があるとの理由で 朝鮮人による孫選手の歓迎行事も禁じられ、孫選手自身も刑事の監視の下に置かれるという状況が生じた。²⁶ しかもこのような事実は、当時の日本人には知らせなかった。両者の間に意思の疎通はありえなかった。

こうした中であっても、孫選手と南選手には親しい関係を築けた日本人達がいた。彼らのコーチや陸上の仲間達である。朝日新聞の報道によれば、彼らのコーチである佐藤秀三郎は、オリンピック選考の際、『生涯を通じて恐らく一度しかない感激』があったという。²⁷ オリンピック前、出場候補は孫選手等を含む四選手がいたが、落とした選手は日本人で、代表選手の三人中二人が朝鮮人だった。日本人選手を落としても朝鮮人選手を取ったということは実力主義の表れで、朝鮮人だからという差別はなかったのだ。しかもその決定後も、四人の「心に僅かのひびも入らなかった」とコーチは語った。コーチが、四人の個人としての信頼関係を信じた証でもあろう。一方孫選手は 戦後になっても上記の『日の丸抹消事件』等の経緯をあまり話したがらなかったという。日本の古い陸上関係者に会うことを彼自身楽しみにしているから²⁸、そして、当時の様子を話すことによって、両者の関係が悪化することを危惧したからである。孫選手にも、日本に心を通わせる人物がいたことが分かる。しかし、それでも、孫選手は「話してはいけない」植民地時代のことに気を遣い続けた。そして孫選手が敬愛したコーチにとって最も大切だったのは、結局のところ「日本のために走れる選手」「日本が勝つための選手」ということだったとしたら、両者の心には悲劇的なすれ違いが存在し続けたのだ。

おわりに

以上のように、日本の植民地帝国内を中心としたスポーツ交流の足跡をみてきた。

スポーツは、試合数で見れば活発に行われていた。しかし残念なことに、最終的にはそれを交流ということは出来ないと結論する。お互いが交流を意識していたものではないからである。マラソンの孫選手の例から分かるように、植民地の人々にとってスポーツで活躍するということは、すなわち「日本からの解放」を表していた。日本人と親しくなるためにスポーツを行っていた訳ではなく、その裏には自らの民族に対する誇りとナショナリズムがあった。ゆえに、日本人との試合を行う際は、日本人が気付く以上の「闘志」を燃やしていたに違いない。日本人側は、そのような植民地の人々の心情に対しあまりにも無知であった。それにも関わらず、望ましいスポーツ交流のあり方の決定は、日本の一存だった。日本は、孫選手を熱烈に讃えた朝鮮に対し、厳しい処罰を課した。以前は、日本チームに植民地チームが勝ってしまっても、日本のスポーツの発展に繋がる利点があれば認可された。ナショナリズムが高揚した時期は、強国日本をアピールするため、能力に秀でた植民地の人を、日本選手として出場させ、良い成績を達成させようとした。しかし、孫選手優勝後の、彼の態度、また朝鮮の動きは、日本にとってマイナスとなったので、強固な姿勢で臨んだ。結局当時のスポーツは、植民地政策の一環だったのである。

孫選手と佐藤秀三郎コーチといった“個人間”では、心の通う交流が行われていたと言い得るかもしれない。しかしながら、当時、両者がどれほど親しい仲であっても、それは交流と呼ぶことは出来ない。なぜなら、朝鮮人と日本人は、植民地制度という壁が隔っていたからである。孫選手の場合、日本人と親しくなればなるほど、朝鮮を捨て、日本へ近づくという矛盾した状態へとになってしまう。したがって、植民地制度がある限り、スポーツ交流が出来る基盤が出来上がっていなかったのである。

戦前の日本の植民地政策では、スポーツは結局のところ国威昂揚が目的であり、全て自国の国益のために行ったものである。そしてそのような動きは、世界の大国間に亘っていた。すなわち、“国”の概念がそうさせていたのである。現在でも、国の相違のためスポーツ交流は不可能なのだろうか。確かに、サッカー・ワールド・カップやオリンピック

ックのように、自国を応援するような大会は盛り上がる事ができるし、選手も真剣にプレーすることだろう。しかし、それがナショナリズムや、国と国の争いに発展しかねるのも事実である。それでは、スポーツを真の意味での交流とするために、“国”という概念を外してしまえばよいのではないだろうか。出身国の異なる選手が同一のチームでプレーすれば、それぞれが国旗を背負うこともない。また、それを観戦する側、そのようなスポーツ大会を主催する側にも、政治的、外交的な思惑は感じられなくなるのではないだろうか。

現実を考えれば、今の世界で“国”としての概念や、国境をなくすことは不可能である。しかしスポーツの世界ならば、国としての枠組を外し、選手一人一人が国家を背負わないで 純粋に個人の資質、実力、力量を競い合うことができるのでないか。それを見ることで、スポーツを競う「国家」を知るのではなく、スポーツを競う「個人」を知ることができる。これが 戦前日本の植民地との「スポーツ交流」の反省から考えた、二十一世紀の国際社会でのスポーツ交流の 望ましいかたちのひとつである。

1 『ラグーン〜クリケット風雲録』<http://homepage3.nifty.com/ccp/hihyou/LAGAAN.html> 2007年2月2日閲覧。

2 東京朝日新聞縮刷版 『日鮮人融和に駒場で大運動会』 1924年4月24日(夕刊), p.2。

3 同上 『女学生も交じって』 1924年4月28日(夕刊), p.2。

4 同上 『満州国大運動会開く』 1932年9月19日(朝刊), p.3。

5 同上 『朝鮮封中部アマチュア拳闘』 1933年11月4日(朝刊), p.3。

6 『極東大会成績』 <http://fukuju3.hp.infoseek.co.jp/kyoku.htm> 2007年5月29日閲覧。

7 中倉一志 『日本と韓国のサッカー 吹き荒れる朝鮮旋風』
http://www.2002world.com/history/japan/jh_020.html 2007年2月2日閲覧。

8 東京朝日新聞縮刷版 『オリンピックへ』 1936年4月14日(朝刊), p.4。

-
- 9 同上 『戦争とスポーツ』 1940年10月11日 (朝刊), p.6。
- 10 同上 『南京戦線 兼子伍長の感想』 1937年12月17日 (朝刊), p.8。
- 11 同上 『戦争とスポーツ』 1940年10月11日 (朝刊), p.6。
- 12 同上 『体力塔 学童・相撲の指導』 1940年10月8日 (朝刊), p.6。
- 13 同上 『運動の国際的使命』 1940年11月19日 (朝刊), p.6。
- 14 同上 『満華遠征を禁止』 1940年6月26日 (朝刊), p.6。
- 15 同上 『東亜武道大会』 1940年5月4日 (朝刊), p.6。
- 16 同上 『東亜大会たより』 1940年5月31日 (朝刊), p.6。
- 17 同上 『事変処理とスポーツの文化的使命』 1940年1月9日 (朝刊), p.8。
- 18 同上 『国民皆運動せよ』 1940年11月21日 (朝刊), p.6。
- 19 同上 『運動の国際的使命』 1940年11月19日 (朝刊), p.6。
- 20 同上 『マラソン廿四年の宿願成る』 1936年8月10日 (朝刊), p.2。
- 21 同上 『オリンピック我が選手 くろず・あっふ』 1936年3月15日 (朝刊), p.4。
- 22 山本照 『「文藝春秋」にみるスポーツ昭和史』 (文芸春秋、1988年) p.258。
- 23 同上 p.258。
- 24 坂上康博 『権力装置としてのスポーツ』 (文芸春秋、1988年) p.236。
- 25 同上 p.235。
- 26 同上 pp.237、238
- 27 東京朝日新聞縮刷版 『五つの魂を一つに打ち貫いた優勝』 1936年9月5日 (夕刊) p.2。
- 28 井出耕也 『「文藝春秋」にみるスポーツ昭和史』 (文芸春秋、1988年) p.286。